

令和元年5月30日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02571

研究課題名(和文)現代ドイツ文学におけるオートフィクションの諸相

研究課題名(英文)Aspects of Autofiction in Contemporary German Literature

研究代表者

シュレンドルフ レオポルト (Schloendorff, Leopold)

首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：20773188

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、同時代のドイツ語文学作品の分析に対する「オートフィクション」概念の適用可能性を検討した。まずルジュヌやド・マンなど先行研究の批判的受容を進め、古典的な自伝との違いを明確にした。その上で、「新メディア」「女性の自伝」「文化産業に置ける作家の自己演出」「経験の虚構化としての想起」という五つの観点から、ハントケ、ホッペ、ガイガーら最新の自伝的テキストを読み解いた。これにより今日「オートフィクション」が新たな局面を迎えていることが示された。同時に国際的な研究ネットワークの強化にも努めた。特に「オートフィクション」研究のアジアにおけるプラットフォームの形成に一定の成果を上げることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、20世紀末から21世紀のドイツ文学を対象とする中で、「オートフィクション」を従来のように自伝の一ジャンルとして狭く限定するのではなく、あらゆるジャンルの自己を主題化したテキストに拡大できるとした。この点に研究史上新しい学術的な意義が認められる。さらに「フェイクニュース」やジャーナリズムにおける捏造スキャンダルが話題となる現代にあって、事実性と虚構性との複雑な関係がかつてなく注目を浴びている。その点で、本オートフィクション研究は狭い文学研究の域を超えた社会的な意義を持ちうる。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to examine the applicability of the concept of "autofiction" to the analysis of contemporary German literature. Our first step was a fundamental differentiation between conventional autobiographies and "autofictional" texts, based on the theoretical approaches of Philippe Lejeune and Paul de Man. Secondly, we analyzed the latest autobiographical works (P. Handke, F. Hoppe, A. Geiger, T. Glavinic, etc.) from five perspectives: "New media", "resurrection of the author", "women's autobiographies", "remembering as an act of fictionalizing experience", and "self-staging of the modern author". In the 21st century, "autofiction" appears to be a widely used method for self-expression. Furthermore, we strengthened the ties of our international research network and managed to establish a unique platform for researchers in the field of autofiction-studies from Germany, Austria, Japan and its neighboring countries.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：アイデンティティ ドイツ語圏文学 オートフィクション 自伝 比較文学 エッセイ 主体

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究代表者レオポルト・シュレンドルフは、オーストリア現代小説を研究するなかで「フィクションと自伝のあいだの混交形態」を表すドゥブロフスキーの概念「オートフィクション」につきあつた。これは18-19世紀に成立した「作家」概念に抗するポストモダン的な関心と連動して近年国際的に注目を浴びるものの、安易に古典作品にまで適用されてしまって概念内容が曖昧化してきてもいる。「オートフィクション」概念の誕生から40年以上たつたいま、「オートフィクション」概念をメディア環境の変化や作家性の復権といった同時代のコンテクストに置きなおす必要を痛感していた。

時を同じくして、研究分担者・山本浩司(早稲田大学)はドイツ現代文学の専門家として、ドイツ文学でも2000年頃から戦後文学の規範だった「信憑性」に代わって、遊戯性や笑いを前面に押し出した自伝もどきの作品が出版されていることに着目していた。2015年度早稲田大学特定課題研究「ドイツ同時代文学におけるオートフィクションの諸相」の枠組みでヴィンクラー、アイヒンガーらオーストリア現代作家ならびにヘルタ・ミュラーの自伝的テキストにおけるメタ次元の遊戯性について研究を進めていたものの、個人研究の限界を痛感していた。このため研究代表者と研究分担者の間で共同研究の機運が高まっていた。

2. 研究の目的

上記の背景のもと、「オートフィクション」概念のドイツ同時代文学への適応可能性を探るとともに、実際の文学作品をケーススタディすることで同概念の修正を図ることを共同研究の目的とすることとなった。そして現代の「オートフィクション」の諸相のなかから取り出した五つの観点によって見直すことで、現代のドイツ文学が戦後文学的な規範からいかに離反していっているかを検証することがもう一つの研究目的となった。

(1)「オートフィクション」の理論的考察。これは共同研究の基礎をなす。ルソー以降の統一的な近代的主観性が自叙伝を書く老年の私と若年の私という二項対立的構図によっていたとすれば、現代の「オートフィクション」はアイデンティティの複数性を強調している。現実を構築物として捉える傾向に着目し、「作家、語り手、主人公のあいだのアイデンティティの自伝的契約(Lejeune)をグロテスクな異化効果によって無効にする遊戯性が問題となる。その際、18-19世紀の自伝モデルとの差別化をはかるために、ポストモダンの作家性に関する議論(Barthes, Foucault, de Man)の再考が不可欠な課題だった。

(2)ニューメディアとオートフィクション。近年の新しい傾向として、紙媒体によらずに、インターネットのブログの形で読者にダイレクトに日常を伝える試みが出てきた(E.イエリネク、R.ゲッツ)。また写真やイラスト、マンガなどのマテリアルを自伝的小説のなかに取り込み、擬似的ドキュメンタリーの手法を取る傾向もある(W.G.ゼーバルト、C.ゼッツ)。新しいメディア環境やメディア間の相互干渉が21世紀の「オートフィクション」にいかなる効果を及ぼしているかをメディア論の知見も取り込みながら検討することを目指した。

(3)作家性の復権とオートフィクション。21世紀には文壇や出版界の内幕暴露小説も数多く見られるようになった(ハントケ、グラヴィニッチ、ロトマンら)。編集者、出版社、書店、読者という小説をとりまく環境を対象とする小説は、現代における作家のありようを問う試みとみなすことができる。さらに作家が見本市や文学賞、テレビのトークショーなどメディアへ露出することによってポストモダンの議論で失効が宣言された「作家性」が再び強調されていることを踏まえつつ、この「作家性」が作家的権威の回復ではなく、作家のアイデンティティを複数化する新たな自己演出であることを検証することとなった。自伝的体裁を取った小説である以上、実名で名指されたモデルからプライバシー権の侵害として法的措置がなされることがある(マキシム・ビラー)。法律が想定する人格とオートフィクションの関係も検討対象とされた。

(4)女性の自伝と歴史的変容。70年代から80年代のフェミニスト批評(Showalter 1977)にあってはこれまで声を奪われていた女性の独自の自伝の意味が問われ、男性中心主義的な社会において女性の体験の真実を伝える言語の不在が嘆かれた(クリスタ・ヴォルフ)。これに対して近年は虚構的自伝がアイデンティティの錯乱的複数性を際立たせている(フェリタス・ホッペなど)。この歴史的変化を跡づけて、女性の書く21世紀「オートフィクション」の意義を考えることが必要だった。

(5)虚構的な経験行為としての想起作業。戦後文学の代表的な作家たちによる自伝的文学がゼロ年代以降書かれるようになった(グラス、エンツェンスベルガー、ポート・シュトラウス)。それらには過去の記憶をフィクショナルに構成されたものとして提示するという特徴がある。それ以前に一般的だった自伝的な語りと比べて、どのような変化が認められるかを検証することで、20世紀文学という長いスパンのなかで自伝と「オートフィクション」的な語りの錯綜した関係を読み取ろうと試みられた。

3. 研究の方法

研究代表者と研究分担者が中心となり早稲田大学、慶応大学、東京大学の院生など若手研究者たちを結集し、原則として隔月で、研究集会を重ねた。毎回、現代ドイツ文学と戦後文学の自伝的色彩の濃い作品を俎上に載せ、ドイツ語で活発な議論を行った。できるかぎり多くのオ

ートフィクションのサンプルを集めて分析するために、研究代表者と研究分担者が共同して選書を務めた。それぞれの作品を「新メディア」「作家性の復権」「女性の自伝」「虚構的な経験行為としての想起作業」という五つの観点から検討した。

同時に国際的な共同研究も推進した。平成 28 年度春には日本独文学会でのシンポジウムに中国から研究者を招聘し、同年夏には上海で開催されたアジアゲルマニスト会議に参加して内外の研究者と議論を深めた。各年度、研究代表者、研究分担者ともに複数回ヨーロッパ圏に出張し、大学図書館や文学資料館で資料の収集を進めるとともに、ウィーン大学、トリア大学、ロストック大学、ハンブルク大学などの専門家たちとの意見交換を進め、各種の国際学会に出席した。

4. 研究成果

「オートフィクション」概念のドイツ同時代文学への適応可能性を探りながら、同時に同概念の修正を図るという研究目的を果たすために、国際化の時代を睨んでドイツ語を公用語とする定期的な研究会を重ね、研究の蓄積ができたのがまず大きな成果である。

まずフィリップ・ルジエンヌとポール・ド・マンの理論的考察に基づきながら、伝統的な自伝的テキストと「オートフィクショナルな」テキストの基本的な差異を明確化することを目指した。第二に、ドイツ語作家の手による最新の「オートフィクショナルな」テキスト(ハントケ、ホッペ、ガイガー、グラヴィニッチなど)のテキストの精読に励みつつ、「新メディア」「作家性の復権」「女性の自伝」「虚構的な経験の行為としての想起作業」という5つの観点から検討し、19世紀における自伝の普遍妥当的な説明モデルに対する批判的な応答と捉えつつも、21世紀同時代文学に限定して作品分析をするなかで、「オートフィクション」概念を再検討した。

共同研究の具体的な成果は、まず 2016 年度日本独文学会春季研究発表会(獨協大学)で、研究代表者が代表者となってドイツ語によるシンポジウムを開催した。伝記とオートフィクションに対して、理論的考察(川島建太郎、慶應大学)、新メディア(眞鍋正紀、東海大学)、女性の自伝(山本浩司、研究分担者)、ドキュメンタリー(ヤン・ジン、上海外国語大学)、エッセイ(シュレンドルフ、研究代表者)と多角的にオートフィクション概念にアプローチして会場の学会員と実りのある議論を展開した。この成果は 2017 年度日本独文学会研究叢書として研究代表者の責任編集にオンライン刊行された。これにより日本における「オートフィクション」研究の現時点での成果を世に問うものである。これとは別に 2016 年 8 月のアジアゲルマニスト会議(上海)で、研究代表者がガイガーの戦争の記憶の世代間継承について、研究分担者がヘルタ・ミュラーの自伝的テキストについて発表した。これらにより、アジア圏の「オートフィクション」研究のプラットフォームの形成に一定の成果をあげることができた。

2017-2018 年度には、研究代表者は単独で、ハントケのエッセイにおける「私」に中心的に取り組んで上記の論集に掲載した論文の問題圏を拡充する一方で()ポストモダンにおける脱主体化に関する理論的考察()アルノー・ガイガーの三世代小説() Ch. クラハトの旅行記() 新メディアとオートフィクション() グラヴィニッチの文壇内幕暴露小説()などに単独で取り組み、「オートフィクション」の幅広い諸相を切り出すことを試みた。また研究分担者も上記論集で論じた女性の書く「オートフィクション」に引き続き取り組み、ヘルタ・ミュラーやフェリシタス・ホッペの自伝的小説(11, 12)やカトリン・レッグラの旅行記()を論じる一方で、この概念の抒情詩への適応可能性を女性詩人モニカ・リンクの詩を例に考察した(口頭発表)。いずれも国内外の学術誌や学術論集に掲載されている(もしくは掲載が決まっている)。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 12 件)

Leopold Schlöndorff, „Kehren wir zum Text zurück!“ Kracht wieder lesen. In: *Jimbun-Gakuho* 515-14/2019. Tokyo (TMU) 2019, S. 95-112. [「テキストに帰ろう!」クラハト再読](査読なし)

Leopold Schlöndorff, „Eines Tages, über den ich in der Gegenwartsform nicht schreiben kann“. Zum Szenario des Störfalls in Literatur und Wissenschaften. In: *Akten des XIII. Internationalen Germanistenkongresses Shanghai 2015: Germanistik zwischen Tradition und Innovation*, hrsg. von Jianhua Zhu, Jin Zhao und Michael Surawitzki. Berlin (Peter Lang) 2018, S. 265-270. [「現在形では書けないある一日」文学と科学における原発事故のシナリオについて](査読なし)

Leopold Schlöndorff, „Vorfahr, zeig dich!“ . Literatur und Erinnern am Beispiel fiktionaler Familiengeschichte(n) bei Peter Handke und Arno Geiger. In: *Erinnerungsliteratur nach 1945. Medien, Kontroversen, Narrationsformen. Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik* 132/2018, hrsg. von Markus Joch. Tokyo (JGG) 2018, S. 64-87. [「ご先祖よ、姿を見せよ!」ペーター・ハントケとアルノー・ガイガーのフィクションとしての家族小説にみられる文学と想起](査読なし)

Leopold Schlöndorff, „Das hat der Peter nur so geschrieben, damit es besser paßt“. **Zu Biografie und Biografismus in der Handke-Rezeption**. In: Waseda-Blätter 25/2018, Tokyo (Waseda) 2018, S. 141-158. [「ペーターの奴は、そのほうがぴったりあうというだけで、そう書いたんだだよ」 ハントケ受容における伝記と伝記主義について](査読あり)

Leopold Schlöndorff, **Der Doppelgänger des Einzelgängers. Motive des Doppelgängers in der literaturwissenschaftlichen Debatte und in Peter Handkes Erzählung Die Wiederholung**. In: Jimbun-Gakuho 514-14/2018. Tokyo (TMU) 2018, S. 19-37. [独行者のドッペルゲンガー 文学研究上の論争とペーター・ハントケの小説『反復』におけるドッペルゲンガーのモチーフ](査読なし)

Leopold Schlöndorff, „Die sogenannte Welt weiß die Wahrheit“. **Zur Selbstthematisierung des schriftstellerischen Möglichkeitsmenschen im medialen Diskurs**. In: Autofiktion heute. Zur literarischen Konstitution des autobiographischen Subjekts in der deutschen Gegenwartsliteratur, hrsg. von Leopold Schlöndorff. Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 122/2017. Tokyo (JGG) 2017, S. 76-92. [「いわゆる世界は真実を知っている」 メディア上のディスコースにおける可能性人間としての作家の自己主題化について](査読なし)

Leopold Schlöndorff, **Die Inszenierung des fremden Ichs. Thomas Glavincis autobiographisches Maskenspiel vor den Kulissen der Medienbühne**. In: Nachleben der Toten. Autofiktion, hrsg. von der Japanischen Gesellschaft für Germanistik unter der Leitung von Hiroshi Yamamoto. München (Iudicium) 2017, S. 174-192. [見知らぬ私の演出 メディアという舞台の書き割りの前でのトーマス・グラヴィニッチの自伝的仮面芝居](査読あり)

Leopold Schlöndorff, „Ich offenbare!“. **(De)-Subjektivierung der Apokalypse heute. In: Möglichkeiten und Querschläge**. In: Erkenntnis durch Erzählung, hrsg. von Christian Zemsauer, Leopold Schlöndorff u.a. Wien (Praesens) 2016, S. 165-179. [「我、公現する!」 現代の黙示録の(脱)主体化(『可能性と飛び跳ね弾』)(査読なし)

Leopold Schlöndorff, „Aus dem Hinterwald jenseits der Geschichte“. **Peter Handke, Essayist zwischen politischer und poetischer Existenz**. In: Waseda Blätter 23/2016. Tokyo (Waseda) 2016, S. 37-56. [「歴史の彼方の背後の森から」 ペーター・ハントケ 政治的実存と詩的実存のあいだに立つエッセイスト](査読あり)

Hiroshi Yamamoto, **Junk Space im Zeitalter des Neoliberalismus Eine poetologische Chronotopographie bei Kathrin Röggla**. In: Mechthild Duppel-Takayama, Wakiko Kobayashi, Thomas Pekar (Hg.): Wohnen und Unterwegssein. Interdisziplinäre Perspektiven auf west-östliche Raumfigurationen. Bielefeld (transcript Verlag) 2019, S.391-410. [ネオリベラリズムの時代におけるジャンク・スペース カトリン・レグラにおける詩学的クロノトポロジー(『住むことと途上にあること』)(査読あり)

Hiroshi Yamamoto, „Was glänzt, das sieht“. **Zur autofiktionalen Schreibweise in der Geheimdienst-Trilogie Herta Müllers**. In: Jianhua Zhu, Jin Zhao und Michael Szurawitzki (Hg.): In: Akten des XIII. Internationalen Germanistenkongresses Shanghai 2015: Germanistik zwischen Tradition und Innovation, hrsg. von Jianhua Zhu, Jin Zhao und Michael Surawitzki. Berlin (Peter Lang) 2018. p.53 - 57. [「輝くものは見ることができる」 ヘルタ・ミュラーの秘密警察三部作におけるオートフィクショナルな語りについて](査読なし)

Hiroshi Yamamoto: “Von Geschichte hatte sie keine Ahnung, alles löste sich in Geschichten auf”. **Zu Felicitas Hoppes autofiktionalem Roman 'Hoppe'**. In: In: Autofiktion heute. Zur literarischen Konstitution des autobiographischen Subjekts in der deutschen Gegenwartsliteratur, hrsg. von Leopold Schlöndorff. Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 122. Tokyo (JGG) 2017. S. 60 - 75. [「物語については彼女の何もわからなかった。すべてが複数の物語に解体した。」フェリシタス・ホッペのオートフィクショナルな小説『ホッペ』について(『オートフィクション・ナウ』)(査読なし)

[学会発表](計7件)

Leopold Schlöndorff, **Wiederholen und Umschreiben. Erinnern bei Peter Handke**. Erinnerungskulturen nach 1945. Keio University. 2018年5月12日

Leopold Schlöndorff, **Der Dichter und sein Bleistift. Betrachtungen zu Materialität und Funktionalität des Schreibens bei Peter Handke**. Poesie und Philosophie in Deutschland um 1800 und die Rezeption in der Gegenwartsliteratur. Waseda University, Cusanus Hochschule und DFG-Kolleg-Forschergruppe der Universität Trier. 2018年3月17日

Leopold Schlöndorff, **The End of the End. Apocalyptic Thinking in a Postmodern Context**. Creation and Destruction of the World, University of Sofia, Bulgaria. 2017年

11月3日

Leopold Schlöndorff, **Generationengedächtnis und –kommunikation am Beispiel von Arno Geigers Roman „Es geht uns gut“**, Asiatische Germanistentagung, „Germanistik in Zeiten des großen Wandels“, Seoul Südkorea. 2016年08月24日

Leopold Schlöndorff „**Und wer war ich noch?**“. **Funktionen der Autofiktion imLiteraturdiskurs**.Frühlingstagung der Japanischen Gesellschaft für Germanistik(JGG), Dokkyo Universität (Saitama). 2016年05月24日

Hiroshi Yamamoto, **Habitus im Zeitalter des globalen Neoliberalismus**. Einige Überlegungen am Beispiel der neueren Texte Kathrin Röggles. Tateshina-Symposion 2019. 61. Kulturseminar der JGG: Literarischer Habitus (JGG) 2019年03月19日

Hiroshi Yamamoto, **Hohn-ich-Protokoll**. Idiologische Dekonstruktion des Subjekts bei Monika Rinck. Konferenz "Subjekt und Liminalität in der Gegenwartsliteratur (Lyrik, Prosa, Drama)" (Universität Trier, FB II – Slavistik, DFG-Projekt „Typologie des Subjektes in der russischen Gegenwartsdichtung 1990-2010“) 2017年7月9日。

〔図書〕(計2件)

Autofiktion heute. Zur literarischen Konstitution des autobiographischen Subjekts in der deutschen Gegenwartsliteratur. Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 122, hrsg. von Leopold Schlöndorff. Tokyo (JGG) 2017. [編著『オートフィクション・ナウ ドイツ現代文学における自伝的主体の文学的構成』(日本独文学会研究叢書122)総頁数94頁]

Möglichkeiten und Querschnitte. Erkenntnis durch Erzählung, hrsg. von Christian Zemsauer, Leopold Schlöndorff u.a. Wien (Praesens) 2016. [共編著『可能性と飛び跳ね弾 物語を通じた認識』総頁数182頁]

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：山本 浩司

ローマ字氏名：(Yamamoto, Hiroshi)

所属研究機関名：早稲田大学

部局名：文学学術院

職名：教授

研究者番号(8桁)：80267442

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。